

SOGO MEDICAL Hint

医業経営情報誌

2016年9月 隔月発行

Vol.196

特集

医師1人に負担をかけず、
チームで支える

新時代の医療提供体制を探る

医療法人ゆうの森
たんぽぽクリニック・たんぽぽ俵津診療所





特集 新時代の
第24回 医療提供体制を 探る

疲弊しない地域医療システムを構築 医師1人に負担をかけず、 チームで支える

医療法人ゆうの森

たんぽぽクリニック たんぽぽ俵津診療所

愛媛県松山市

医療法人ゆうの森は、松山市内のたんぽぽクリニックと西予市俵津のたんぽぽ俵津診療所を中心に、各地域で在宅医療を展開している。1人の医師が地域を支える従来のスタイルを見直し、複数名の医師が交代で地域医療を担うシステムを構築。患者さんや家族だけでなく、医師も安心感をもって地域医療に従事する仕組みを整えている。



医療法人ゆうの森

たんぽぽクリニック

〒791-8056
愛媛県松山市別府町444-1
TEL:089-911-6333
<http://www.tampopo-clinic.com>

■診療科目：内科、在宅医療
■病床数：16床



医療法人ゆうの森

たんぽぽ俵津診療所

〒797-0111
愛媛県西予市明浜町俵津3-228
TEL：0894-65-0026

生きがいとは 人に必要とされること チームで地域医療の 充実を実現したい

医療法人ゆうの森

理事長

永井 康德 氏



人の役に立つことを目標に 学生時代から地域医療を志向

永井康德氏が医師を志したのは中学生のころ。人の役に立ち、常に新しいことにチャレンジできる仕事として医師を選択した。医学部進学後は、へき地でのフィールドワークを中心としたサークル活動に取り組み、真珠養殖が盛んな地域で労働体験をしながら、住民と向き合ってきた。卒業後、自治医科大学で研修を積み、30歳で西予市の国保俵津診療所に赴任。本格的に地域医療に従事するようになった。

「今から20年前のことですが、当時はまだ、最期は病院で迎え、食べられなくなると点滴で栄養補給するのが当たり前の時代でした。ある時、在宅で療養する102歳の方が、いよいよ最期を迎える状態で食事を受け付けなくなりました。本人は『点滴はしなくていい』と言い、家族は『最期まで治療を』と望みました。家族と話し合いを重ねた後、本人の希望を受け入れ、点滴をしなかったところ、むくみもなく、穏やかに大往生されました。最期を迎えるとき、点滴は本人の負担を大きくすることもあります。亡くなるまで点滴をし続けるの

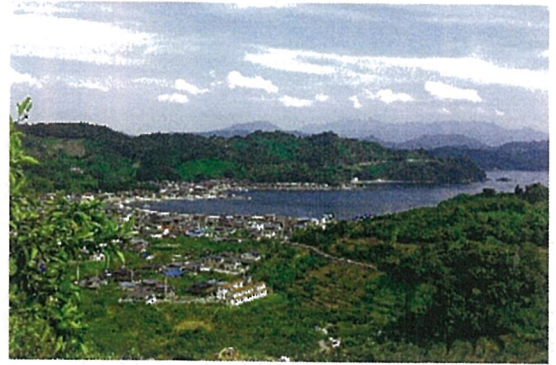
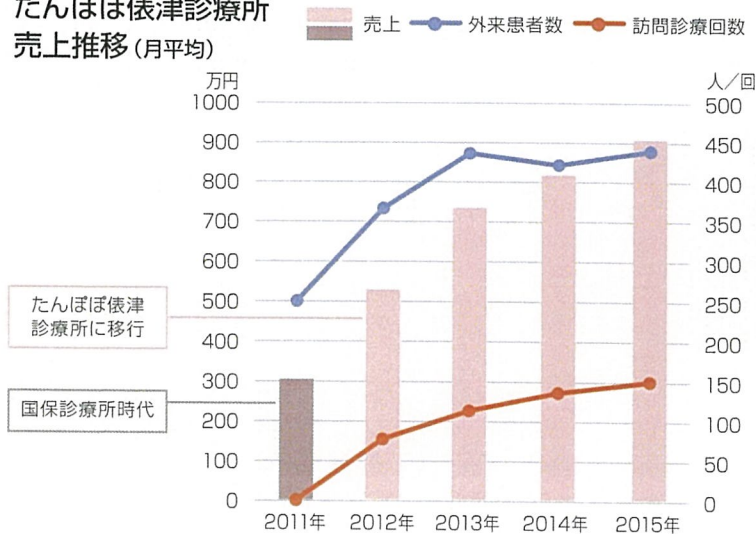
ではなく、死に向き合い、自然な看取りを行うことが最も楽しいことを学びました。」と永井氏は振り返る。

国保俵津診療所勤務時代は、地域住民の3分の1を看取るなど、地域で欠かせない存在となっていた。「看取りの際、本人や家族の不安を取り除く大切さを知りました。在宅医療は片手間ではできないので、しっかりとやっという覚悟を決めました。俵津では本当に多くのことを学び、地域の方に育ててもらいました」と語る。2000年、松山市で在宅医療専門のたんぼぼクリニックを開業するため、俵津を離れる際は、子どもからお年寄りまで駐車場を埋めつくすほどの多くの人たちが見送りに来てくれたという。

開業から12年、永井氏が松山市で在宅医療を充実させている一方、国保俵津診療所では、後に赴任した医師が余り積極的に在宅医療を行わなかったため、地域の自宅での看取り率はゼロになり、ほとんどは地域外の病院や施設で亡くなるようになっていた。患者数が減少した国保俵津診療所は赤字が累積。閉鎖の危機に陥った。

「住民の方が『診療所がつぶれてしまう。何とかしてくれ』と訴えてきました。何とかしなければいけないと思い、当法人

たんぼぼ俵津診療所 売上推移(月平均)



農業、漁業が主な産業の俵津地区。



たんぼぼクリニック、俵津診療所を結び、多職種で行う朝のミーティング。



日本サービス大賞地方創生大臣賞を受賞。



特集 新時代の医療提供体制を 探る

で国保俵津診療所の運営を担えるように動き始めました」。

当時、たんぼぼクリニックには7人の常勤医が在籍。1人の医師を俵津専任にするのではなく、曜日ごとに交代で担当する方法はないかと考え、2つの診療所で共通のITツールで患者情報を常に共有し、また毎朝のウェブ会議で、医師全員が治療方針を確認し合うなど、交代勤務が可能なシステムを構築した。この方法で、へき地においても最新の医療に触れ、松山の多数の在宅患者のマネジメント方法を共有できるようになった。

地域の活性化に大きく 貢献したとして 日本サービス大賞 地方創生大臣賞を受賞

同法人が国保俵津診療所の運営を引き継いだ2012年、同地区の人口は、以前の1800人から1200人にまで減少していた。「人口減の中でも、年間3000万円の赤字を黒

字転換する自信はありました」と永井理事長。訪問診療を再開させるほか、在宅医療に向かう地域を車で30分圏内に拡大。看護師が行っていた調剤業務を地元の薬局に医薬分業することで、本来の仕事に集中させた。

また電子カルテやクラウド型の情報共有ツールの導入、モバイル端末の使用により、患者情報等の共有を即時的、多方面から行っている。さらに、医師が診療所に泊まり込んで24時間対応する在宅医療サービスの開始に、現地の住民からは「医師の住宅に明かりが灯っているだけで安心です。」との声も聞かれ、診療所の変化に、他地域へ受診していた患者が診療所に戻ってきたのである。

これらの取り組みにより、4カ月で黒字に転換。在宅での看取り患者も増え、外来患者は予約制を取るまでになり、地域住民の安心感も増している。

「医師個人・家族の生活もあるため、地域に常駐するのは難しいが、地域医療に携わりたいと思う医師の気持ちは尊重できる。医師1人で担当していると『これでいいんだろうか』という不安も生じますが、チームで取り組んでいるので、さまざまな意見をもとに判断する安心感もあります」。



「自分にしかできないことをチャレンジし続ける」と話す永井理事長。



俵津の地域活性化のきっかけともいえる診療所主催の「夕涼み会」。



2012年、たんぼぼ俵津診療所開設を機に訪問診療を再開。

同法人の取り組みは医療の提供にとどまらず、俵津地域の活性化にも及んでいる。同診療所は毎夏、「夕涼み会」を開催し、子どもからお年寄りまで約300人が参加している。また、地域の主婦たちが創業した弁当屋が、高齢者への宅配サービスも行ったり、地元の農業法人が介護サービス量の乏しさを改善しようと有料老人ホームを立ち上げるなど、地域支援の輪が広がり、まさに地域の医療、介護の拠りどころとしての役割も担っている。

同法人の取り組みは今春、日本サービス大賞地方創生大臣賞を受賞。地域の活性化に大きく貢献したと評価された。

医療が安定すると介護の質も高まる好循環を生み出す。雇用も創出し地域の活性化にも寄与する。永井氏は「究極の地域医療は、まち作り」と力を込める。

医療だけでなく地域づくりの視野も備えた医療人を育成

永井理事長が在宅医療を行う上で大切にしている言葉

は、「楽なように、やりたいように、後悔しないように」と云う言葉だ。治らない病気や老化に直面した時、いつか人は亡くなるということに向き合い、亡くなるまでどう生きるのかを考える。病気はもう治せなくても、楽にすることはできる。とにかく楽になれば、やりたいことも出てくる。やりたいことを支援して、「いい時間」を過ごしてもらおう事にとことん向き合う。そして全ての選択肢を提示して、患者家族の揺れる気持ちに向き合い、後悔しないようにするのだ。

永井理事長は、この思いをスタッフだけでなく、医療を志す学生にも伝えている。毎年開催している「地域医療塾」には、地元大学のみならず全国の看護学生や医学生などが参加し、地域医療について学んでいる。多くの学生は講義で「病気を治す」考え方は学んでいるが、老いや病気とともに「生活を支える」視点は学んでいない。塾では「クリニックから地域を変えることができるのか。どのようなことをしたらよいか」といったワークショップも開催。医療提供だけでなく、地域や文化といった広い視野を持つよう促している。また、研修医の受け入れも熱心に取り組み、同院で研修した医師が今春、10年ぶりに戻り、たんぼぼクリニックに従事し始めた。



看護学生や医学生に地域医療の考え方を伝えている。



研修医のほか、在宅医療を志向する人たちの見学を多く受け入れている。



地域医療実践のため、地域づくりの視野を持つ人材を育成。



急性期から在宅への移行を円滑にする「たんぼのおうち」。



16床の居室は、患者や家族が落ち着ける雰囲気。



最期まで口から食べられるよう食材の工夫を重ねるクックラボ。

特集 **新時代の医療提供体制を** 探る

永井理事長は「成長して帰って来てくれてうれしい。やってきたことがすぐに実を結ばなくても、いつかは実を結びます。スティーブ・ジョブズが言った“Connecting the Dots.まさにその時、その時を一生懸命生きれば、その点はつながって結びついていく”を実感しています」と語る。

同法人は今春、在宅療養支援病床&ホスピス・緩和ケア病床として、「たんぼのおうち」(16床)を開設した。病院から在宅への流れを促し、患者の安心感を高めるのが目的だ。

「病院の医師の中には、在宅医療がイメージできないために『家に帰るのは無理』と判断する人もいます。『たんぼのおうち』を開設したことで、病院からの紹介が増えており、在宅医療に移行するハードルが下がったと思ってもらっているのではないのでしょうか。また、家からホスピスへ移行した場合、そこでまた新たな人間関係の構築が必要です。最期を迎えるという時に、そのストレスはつらすぎます。『たんぼのおうち』は、医師やスタッフが変わらないため、在宅へ移行する際、在宅からホスピスへ移行する際のストレスを軽減する施設です」と永井理事長。

「私は3年前に癌を患いました。実際に患者の立場で入

院した時に思ったことがあります。医療従事者は2つのグループに分かれると思いました。患者に医療を施すことを最優先する人たちと真の意味で患者の立場を考えて寄り添う人たちです。まさにDoing(施す)の医療とBeing(寄り添う)の医療です。医療従事者と患者は、施し施される関係ではないのです。自分も患者になった時、世界が変わりました。亡くなるまでその限られた人生をどう生きるか。1日1日を大切に、人に必要とされる仕事をしていきたいと思っています。

CLINIC DATA

クリニックデータ

2000年 訪問診療専門の診療所「たんぼクリニック」を開設。12年にへき地医療に取り組む「たんぼ徳津診療所」を開設し、両診療所を中心に、「訪問看護ステーションコスモス」「居宅介護支援事業所コスモス」「訪問介護事業所コスモス」「はりきゅうマッサージ治療院クローバ」を運営している。